

受難物語サイクルの成立と「勝利の十字架」石棺⁽¹⁾

山田 香里

4世紀前半、初期キリスト教石棺上に「勝利の十字架（アナスタシスの十字架）」と呼ばれる表現が登場する。これは、オリーブの枝の冠の中にキリストのモノグラムを収めたものをラテン十字形の十字架上に載せた表現とされている。そして、多くの場合、十字架の足元に一對の兵士が描かれ、十字架の横木の上に対の鳩がいる。この「勝利の十字架」を、石棺中央に配したものを「勝利の十字架」石棺、あるいは、アナスタシス石棺と呼ぶ。ヴァチカンのピオ・クリスティアーノ美術館蔵の「勝利の十字架」石棺（後述の石棺リスト1）は、列柱型石棺であるが、「勝利の十字架」表現の左側に「キレネ人シモン」、右側に「ピラトの前のキリスト」、「ピラト洗手」の二つずつ、計4場面のキリスト受難伝の物語表現を配している。こうしたキリスト受難の物語のエピソードで飾られたいわゆる受難石棺は4世紀の中ごろに登場するが、この時期までに、一連のキリスト受難物語サイクル表現が成立していたと考えられる。しかし、キリスト受難物語のクライマックスともいえる、「磔刑」の表現が登場するのは5世紀に入ってからのことで、受難石棺上では描かれることはなかった。本稿では、受難物語サイクルが成立する過程で、4世紀後半に集中的に描かれた「勝利の十字架」石棺について、その表現形式と石棺内での構成について論じ、図像の意味と、石棺上で果たした役割について明示するものとする。

1. 「勝利の十字架（アナスタシス）石棺」⁽²⁾

「勝利の十字架」表現を石棺の中央モチーフに採用したアナスタシス石棺群は、4

- (1) 本論での石棺に付与した番号は以下のカタログによる Rep. I=G. Bovini, H. Brandenburg, F. W. Deichmann, *Repertorium der christlichen-antiken Sarkophage, Bd. 1, Rom und Ostia*, Wiesbaden, 1967; Rep. II=J. Dresken-Weiland, H. Brandenburg, *Repertorium der christlichen-antiken Sarkophage, Bd. 2, Italien mit einem Nachtrag Rom und Ostia, Dalmatien (Museen der Welt)*, Mainz, 1998; Rep. III=B. Christern-Briesenick, *Repertorium der christlichen-antiken Sarkophage, Bd. 3, Frankreich, Algerien, Tunesien*, Mainz, 2003; WS=G. Wilpert, *I sarcophagi cristiani antichi*, Città del Vaticano, 1929/1936
- (2) A. E. Felles, s.v. *Croce (Crocifissione)*, in *Temi di iconografia paleocristiana*, Città del Vaticano, 2000, pp.158-162; E. Cavalcanti, s.v. *Croce*, in *Enciclopedia dell'arte medievale*, vol.5, pp.529-535; A. Saggiolato, *I sarcophagi paleocristiani con scene di passione*, Bologna, 1968; S. Schrenk, *Typos und Antitypos in der frühchristlichen Kunst*, engr. *Jahrbuch für Antike und Christentum*, 21, 1995, pp.35-51 名取四郎「初期キリスト教美術におけるアナスタシスの十字架について」、『別府大学芸術学論叢』（第2号、1979年）、28-42頁；辻佐保子『ローマ サンタ・サビーナ教会木彫扉の研究』、中央公論美術出版、2003年、138頁以下

世紀の中ごろから5世紀初頭の短い、限られた時間に制作された。ここでは改めてリストを明示し、石棺タイプと周辺の表現について言及しておく⁽³⁾。なお、石棺に付加した番号は註2の名取論文の石棺リストに依拠している。名取論文の中には、明らかに「勝利の十字架」表現が描かれているのか分からない石棺もリストに挙がっているが、ここではそれらも取り上げておく。

1. ヴァティカン、ピオ・クリスティアーノ美術館蔵、列柱型石棺（キリスト受難伝）、4世紀中ごろ、WS 146-3, Rep. I, 49（図5）
2. ヴァティカン、ピオ・クリスティアーノ美術館蔵、樹木型石棺（ペテロとパウロの受難伝）、4世紀後半、WS 142-3, Rep. I, 61
3. サン・セバスティアーノのカタコンベ蔵、列柱型石棺断片（キリスト受難伝か？）、4世紀最後の30年、WS 217-7, Rep. I, 201
4. サン・セバスティアーノのカタコンベ蔵、樹木型石棺断片（ペテロとパウロの受難伝）、4世紀第三四半期、WS 142-2, Rep. I, 215
5. サン・ヴァレンティーノのカタコンベ蔵、フリーズ型石棺（キリスト、ペテロ、パウロの受難伝）、4世紀最後の30年、WS 146-1, Rep. I, 667
6. ヴァティカン、ピオ・クリスティアーノ美術館蔵、列柱型石棺断片（右端の断片はサン・セバスティアーノのカタコンベ蔵、アクラマティオの使徒たち）、4世紀末から5世紀初頭、WS 18-5, Rep. I, 59（図4）
7. ヴァティカン、ピオ・クリスティアーノ美術館蔵、城門型石棺（アクラマティオの使徒たち）、4世紀第四四半期、WS 238-6, Rep. I, 65
8. サン・セバスティアーノのカタコンベ蔵、フリーズ型石棺（アクラマティオの使徒たち）、4世紀第四四半期、WS 238-7, Rep. I, 175
9. サン・セバスティアーノのカタコンベ蔵、ストリギリス型石棺（ペテロとパウロ）、4世紀最後の30年、Rep. I, 224
10. コモディルラのカタコンベ蔵、ストリギリス型の変形（「勝利の十字架」のみ描かれる）、4世紀末、WS 241-1, Rep. I, 653
11. サンティ・クアットロ・コロナーティ教会蔵、ストリギリス型石棺（十字架とモノグラムのみ）、5世紀初頭、WS 241-3, Rep. I, 758
12. パレルモ、大聖堂蔵、フリーズ型石棺（アクラマティオの使徒たち）、4世紀最後の30年、WS 239-2, Rep. II, 143
13. スプリット（クロアチア）、博物館蔵、フリーズ型石棺の側面（二使徒）、4世紀

(3) 名取論文でリストにはないが追記として挙げられたマルセイユの石棺が本論文のリスト30番、また名取論文発表当時には紹介されたことなかったイェルサレムの石棺をリスト32番に挙げた。

- 後半、WS 238-1, Rep. II, 146
14. マルセイユ、サン・ヴィクトール教会クリュプタ蔵、樹木型石棺（ペテロの受難）、4 世紀末、WS 16-3, Rep. III, 297
 15. アルル、考古学博物館蔵、列柱型石棺断片（キリスト受難と奇跡伝）、4 世紀最後の 30 年、WS 146-2, Rep. III 55, 154（右半分はアビニョンに保管）
 16. アルル、考古学博物館蔵、列柱型（或いは城門型）石棺断片（キリスト伝）、4 世紀第四四半期、WS 123-1, Rep. III, 67
 17. アルル、考古学博物館蔵、フリーズ型石棺（アクラマティオの使徒たち）、4 世紀最後の 30 年、WS 11-4, Rep. III, 49
 18. エクス・アン・プロヴァンス、博物館蔵、石棺小断片、4 世紀最後の 30 年、WS 137-8, Rep. III, 20（あまりに小さい断片で「勝利の十字架」表現は確認できない）
 19. ニーム、サン・ボーデーユ教会蔵、列柱型石棺（キリスト受難伝）、4 世紀第四四半期、WS 16-2, Rep. III, 412
 20. ヴェゾン・ラ・ロメーヌ、ナザレの聖母教会蔵、城門型か列柱型石棺断片（アクラマティオの使徒たち）。4 世紀第四四半期、WS 240-2, Rep. III, 556。この石棺も 18 の石棺と同様、中央のモチーフが残されておらず、ヴィルペルトの再構成図から「勝利の十字架」石棺と判断されているものである。
 21. マノスク、ノートルダム教会、フリーズ型石棺（アクラマティオの使徒たち）、4 世紀最後の 30 年、WS 192-6, Rep. III, 282
 22. サン・マクシマン、サント・マリー・マッドレーヌ教会蔵、列柱型石棺（キリスト伝）、4 世紀第四四半期、WS 145-7, Rep. III, 497
 23. ヴァランス、博物館蔵、列柱型石棺断片（ペテロの受難か）、4 世紀末、WS 142-1, Rep. III, 569
 24. サン・ピア、サン・ピエール教会蔵、列柱型石棺（アクラマティオの使徒たち）、4 世紀末、WS 240-3, Rep. III, 503
 25. ヴァレンシア、博物館蔵、ストリギリス型石棺（兵士の代わりに羊が描かれる）、WS 241-2
 26. ソワツソンの石棺（マビオンによる銅版素描）、列柱型石棺（キリスト伝）、4 世紀終わりの 30 年、WS 1, p. 23, fig. 9, Rep. III, 510
 27. サン・レミの石棺（18 世紀の素描）、フリーズ型石棺（アクラマティオの使徒たち）、4 世紀最後の 30 年、WS 2, p. 292, fig. 183, Rep. III, 504
 28. ニームの石棺（素描）、4 世紀後半、WS 2319, fig. 200, Rep. III, 416
 29. ローマ、パラッツォ・デル・ドゥーカ・デ・チェリの石棺（アントニオ・ボシオ



図1 イェルサレム、聖書の土地博物館蔵、石棺 (Rep. II, 104)

- による素描)、4世紀第四四半期、WS 2, p. 325, fig. 204, Rep. I, 933
30. マルセイユ、サン・ヴィクトール教会、クリュプタ、列柱型石棺断片 (アクラマテリオの使徒たちか?)、4世紀後半、WS 108-7, Rep. III, 294
31. イェルサレム、聖書の土地博物館蔵、ストリギリス型石棺 (キリスト伝他)、330年ごろ、Rep. II, 102⁽⁴⁾ (図1)

以上に挙げた石棺のうち、18、20番の石棺はヴィルベルトの再構成図によって「勝利の十字架」が石棺中央に配されていると判断されているものである。作品の現状は、石棺中央部が欠損しており、ここに「勝利の十字架」が描かれていたかどうかは推測の域を出ないため、ここでは「勝利の十字架」石棺と判断しないこととする。従って、素描や断片も含めて合計で29の「勝利の十字架」石棺が確認できたことになる。この29例の「勝利の十字架」図像をその構成要素によってグループ分けをしておきたい。まず、「勝利の十字架」の縦軸両脇には、概ね兵士が描かれるが、例外として泉に水を飲みに来る一対のシカ (石棺リスト14)、二使徒 (9)、一対の羊 (25)、墓を訪れる女たちの物語表現 (29) の4作例があげられる。さらに、リスト11や13の作例では、十字架の縦軸の両側には何も描かれていない。また、これ以外の作例では両側に一対の兵士が描かれているが、兵士が座像の15作例 (石棺リスト1-5、8、12、15、17、23、26、27、28、30、31) と、兵士が立像の8作例 (6、7、10、16、19、21、22、24) に分けられる。兵士が座像の場合、左側の兵士が上を向き、

(4) この石棺が最初に紹介されたのは70年代の終わりのことであり、ヴィルベルトのカタログにも名取論文のリストの中にも挙げられていない。B. Brenk, *The Imperial Heritage of Early Christian Art*, in ed. K. Weizmann, *Age of Spirituality, A Symposium*, MET, New York, 1980, p.43, fig.8

右側の兵士が下を見ている場合が多い⁽⁵⁾。

「勝利の十字架」図像は4世紀前半、330年ごろの制作とされるイエルサレムの石棺（石棺リスト31、図1）上に初めて登場している。現在、イエルサレムの博物館に所蔵されているこの石棺は、蓋、棺身共に残った比較的大型のストリギリス型石棺である。棺身は波型の区画を入れて5つに分割され、両端の区画は上下二段に分けられて計4つのキリストの物語が描かれている（そのうちひとつはアダムとエヴァの間に立つキリスト）。中央の区画の上部には、死者夫妻像と思われるイマゴ・クリペータが配され、その下の区画に置かれているのが「勝利の十字架」である。十字に組み合わされた横木の上に、植物の枝で作られた円が置かれ、その中にキーロータイプ（ギリシア語のXとP）のキリストのモノグラムが置かれている。モノグラムを囲む円の下方には両側にリボンのようなものがある。そして横木の両端、リボンの先端部には、一対のハトが羽を広げてモノグラムに向かって頭を上げている。横木の下には、縦軸の両側に一対の兵士が座す。左側の兵士は左手にやりを持ち、右手には盾を持ってモノグラムを見上げており、もう一方の兵士は武具の上にあごを乗せて物憂げな様子である。これが「勝利の十字架」と呼ばれる図像だが、ここではハトの上部に一対の神像が描かれる。左が太陽の、右が月の擬人像であると思われる。

この「勝利の十字架」図像の起源は、皇帝美術に描かれた戦勝記念の図像、トロフェウム（トロパイオン）にあるとされる⁽⁶⁾。ローマ軍は敵に勝利した際、T字型のくびきの上に、戦利品を掲げて練り歩いたという。この戦利品をかぶせたくびきをトロフェウムと呼ぶ。トラヤヌス帝の記念柱に描かれたトロフェウムを見ると、T字型のくびきの縦軸には鎧が、そしてその上にはかぶとが置かれる。横軸には盾をはじめとする武具が置かれている。そして、傍らには勝利の女神が描かれている。このトロフ



図2 マインツ、ローマ・ゲルマン中央美術館蔵、戦闘石棺断片

ェウムの表現形式は、貨幣にもよく描かれ、流布していた。マインツの石棺断片（図2）には、中央にトロフェウムが置かれ、その左右には一対の座像の人物と立像の人物が描かれる。うつむいた4人の人物像は、戦利品の一つである捕虜を表現しているという。ここ

(5) 名取四郎、前掲論文、36頁

(6) A. Grabar, *L'empereur dans l'art byzantine. Recherche sur l'art officiel de l'Empire d'Orient*. Strasbourg, 1936, pp.239-243



図3 ヴァティカン、ピオ・クリスティアーノ美術館蔵、石棺断片 (Rep. I, 62)



図4 ヴァティカン、ピオ・クリスティアーノ美術館蔵、石棺断片 (Rep. I, 59)

ではトロフェウムの縦軸には鎧ではなく布地が下げられている。興味深い作例は、ヴァティカン、ピオ・クリスティアーノ美術館蔵の樹木型石棺断片である(図3)⁽⁷⁾。トロフェウムと同様のT字型のくびきの上に布がかけられ、その上にフェニックスと思しき鳥が立つ。フェニックスの両側にいるのは一対の鳩であろう。そして、トロフェウムに向かって冠を持った使徒たちが歩み寄る表現であると思われる。つまり、ここでトロフェウムは使徒たちが称揚する対象となっているのである。たとえば前掲の石棺リスト5番のピオ・クリスティアーノ美術館蔵の石棺上(図4)には、「勝利の十字架」の両側に12人の使徒たちが描かれている。彼らは手に冠を携えている。これはアクラマティオの使徒たち表現の一変形と考えられる。したがって、前述の樹木型石棺のトロフェウムは、「勝利の十字架」と同じ機能を持つものと考えていだろう。

もう一度イエルサレムの石棺の「勝利の十字架」を観察してみると、十字架の両脇にいる兵士のうつむくさまは、トロフェウムの下に描かれた捕虜のようである。また十字架は縦軸は横軸の上にほとんど出ておらず、T字型に近いものとなっている。モ

(7) Rep. I, 62, WS 18-3

ノグラムの冠が置かれているのは、ちょうどトラヤヌス帝記念柱のトロフェウム上のかぶとと同じ位置である。そして、冠の下にはリボンのような布地が描かれているが、これはトロフェウム上に置かれた布地の表現の名残であろう。異教的な太陽と月の擬人像表現が目立って描かれているのも特徴的である⁽⁸⁾。

2. 受難物語のサイクルと「勝利の十字架」

「勝利の十字架」の周辺には、受難物語を配しているものもある。ヴァティカンのピオ・クリスティアーノ美術館蔵の列柱型石棺（石棺リスト1、図5）では、列柱型石棺の左区画より、「キレネ人シモン（十字架の道行）」、「いばらの冠」、「勝利の十字架」、「ピラトの前のキリスト」、「ピラト洗手」が並んでいる。この石棺は4世紀中ごろの制作と考えられており、この時期までにはキリストの受難物語サイクルがある程度成立していたと推定できる。だが、石棺上に受難物語のクライマックスである磔刑図が描かれることはない⁽⁹⁾。磔刑図が最初に登場するのは5世紀になってからであり、その最初期の作例のひとつが大英博物館蔵の象牙浮彫である（図6）⁽¹⁰⁾。これは四枚の長方形の象牙浮彫であって、本来は箱型をしていたと考えられる。この作例を見ると、「ピラト洗手」、「十字架の道行き」、「ペテロの否認」が一つの画面に描かれ、さらに「ユダの死」と「磔刑」が並んで一画面の中に描かれ、「空の墓」と「トマスの不信」はそれぞれ一つの画面に描かれている。この象牙浮彫による磔刑図は興味深い。裸体のキリストはあたかも自らの肉体が十字架そのものであるかのような形で、



図5 ヴァティカン、ピオ・クリスティアーノ美術館蔵、受難石棺（Rep. I, 49）

- (8) この擬人像表現も、「勝利の十字架」図像の特徴といえ、石棺リストの1、3、19、26、28に見られる。これらはみな、列柱型石棺である。
- (9) 十字架磔刑図像に関して、文献学的資料から論じた論文として以下を挙げておく。保坂高殿「古代キリスト教における十字架磔刑図像の成立」、『経験としての聖書（大貫隆教授献呈論文集）』聖書学論集41号（2009年）、551-564頁
- (10) ed. K. Weitzmann, *Age of spirituality*, MET, New York, 1979, no.452, AA. VV., *Dalla terra alle genti*, Electa, 1996, p.239, no.108

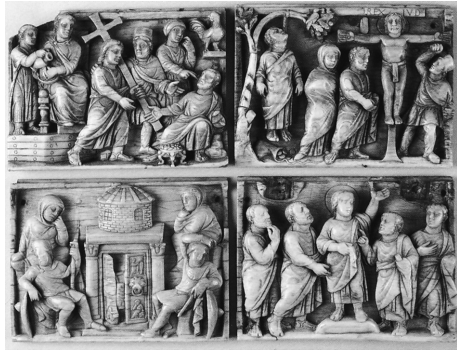


図6 ロンドン、大英博物館蔵、象牙浮彫

両腕を水平に広げている。キリストの背後にあるはずの十字架は、その足元以外の部分は肉体によって隠されてしまっており、その存在感は希薄である。一方、同じ世紀に造られた、ローマのサンタ・サビーナ教会入り口の木彫扉に刻まれた磔刑のキリストは、両側に一人ずつ、共に磔刑に処せられた罪人を従えて、あたかもオランズのポーズをとったような姿勢である。そして、背後の十字架はキリストの体に隠されてほとんど見ることはできない。6世紀のラヴェンナの教会堂、サンタポリナーレ・ヌオヴォ教会では、身廊左右の側壁面に新約聖書物語サイクルが描かれる。アプシスに向って左側側面には、「カナの婚礼の奇跡」に始まるキリストの公生涯が、右側の側面には「最後の晩餐」に始まるキリスト受難伝が配されている。受難伝は「最後の晩餐」のあと、「オリブ山の祈り」、「ユダの裏切り」、「キリスト逮捕」、「カイヤファの前のキリスト」、「ペテロ否認の予告」、「ペテロの否認」、「銀貨を返すユダ」、「ピラト洗手」、「十字架の道行き」、と続くが、磔刑図は描かれず、その次に配されるのはキリスト復活後の「墓での女たち」である。そのあと「エマオへの道」、「トマス不信」と物語は続く。今では失われたアプシスの図像が磔刑図であったという説もあるが、これは推測の域を出ない⁽¹¹⁾。同様に6世紀の聖書写本、アウグスティヌスの福音書でも受難物語が物語サイクルとして展開するが、物語は「十字架の道行き」で終わっている。この二つの作例において物語は、キリストの受難物語を詳細に追って展開しており、磔刑図はあえてここで意図的に描かれなかった、と考えるべきであろう。

このように、他の受難物語表現に比べ、磔刑図、あるいは十字架図像の出現が時代的に遅いのは、まずは先行作例の欠如によるものであろう。キリスト教美術はその誕生時に、既にユダヤ教美術やローマの異教美術などで描かれていた表現を元に自分たちの表現を獲得していったという事情がある。死を伴う屈辱的な磔刑の図像は、先行例もない上、石棺やカタコンベの壁画といった死者の平安や救済を願う葬礼美術という枠組みの中では、その扱いに苦慮したであろうことは想像に難くない。実際にキリストの磔刑図を描き始めた際も、試行錯誤しているように思われる。最初の磔刑図のひとつと考えられるロンドンの象牙パネルの作例を見ると、磔刑図は、十字架それ自体は殆どキリストの体の後ろに隠れて見えないし、キリストの堂々とした肉体は、左端の首吊りのユダと対比されてユダの死を強調することはあっても悲惨な十字架上の

(11) 辻、前掲書、141頁、註21

死を示しているとはいえない。サンタ・サビーナ教会の木彫扉の磔刑図にしても、このキリストのポーズは石棺やカタコンベの壁画によく見られるオランズ像を表現しているかのようなのである⁽¹²⁾。このキリストの裸体表現は、石棺上で裸でオランズのポーズをとる「ライオンの穴のダニエル」の表現にも類似する。同じ5世紀のブレシャのリプサノテカ⁽¹³⁾では、非常に苦慮してキリストの受難を表現している。首をつったユダと対比して描かれるつるされた魚がキリストの受難を表現しているものと思われる。

さて、「勝利の十字架」石棺上にキリストの受難物語が配される作例としては、前述の石棺リスト1番のみが挙げられる。これは4世紀中ごろの制作とされ、「勝利の十字架」石棺の中ではイェルサレムの石棺の次に古いと考えられている。十字架の両側にキリストの復活の証人である兵士を配し、その上に載せられたキリストのモノグラムは勝利のしるしである木の枝で作られた冠によって囲まれている。したがって、勝利の十字架全体で、十字架上の死ののち復活したキリストの勝利を表現していることになる。つまり、この受難物語を周辺に配した「勝利の十字架」石棺において、「勝利の十字架」表現は、磔刑そのものではなく、復活のキリストの勝利を示すものと考えられる。

3. アクラマティオの使徒たちに囲まれた「勝利の十字架」

石棺上の「勝利の十字架」は、聖書物語場面に囲まれている12作例（石棺リスト1-4、9、14-16、19、23、26、31）と、寓意的なモチーフに囲まれている作例とに分けられる。寓意的な表現の多くがアクラマティオのポーズをとる使徒たちの表現である（石棺リスト5-8、12、13、17、22、24、27、29の11例）。また、石棺リスト10番や11番の石棺のように、「勝利の十字架」が単独で石棺中央に描かれる場合もある。アクラマティオとは、右手を挙げたポーズのことをさすが、元来皇帝美術における臣下の表現の一つで、皇帝称揚のための表現である。アクラマティオの12使徒に囲まれた石棺の中央モチーフとしては、「勝利の十字架」表現の他に、「トラディティオ・レギス」図が挙げられる。逆に「トラディティオ・レギス」図が、「勝利の十字架」表現のように受難物語の中央に配置される例もあった⁽¹⁴⁾。たとえば、石棺リスト19番のサン・ポーディユ教会蔵の石棺と、ヴァティカン、ピオ・クリスティア

(12) サンタ・サビーナ教会の木彫扉で繰り広げられる受難物語は「ペテロ否認の予告」「カイヤファの前のキリスト」「ピラト洗手」「十字架の道行き」「磔刑」「墓での女たち」「女たちの前のキリスト」「使徒たちに現れたキリスト」である。

(13) 辻佐保子編『世界美術大全集7 西欧初期中世の美術』、小学館、1997年、挿図121

(14) 拙稿、「トラディティオ・レギス（法の授与）図再考 ミラノ、サンタンブロジオ教会蔵、ステイリコ石棺をめぐる考察」、『神学研究』57号（2010年）95-109頁

ーノ美術館蔵のトラディティオ・レギス石棺 (Rep. I, 58) はともに、石棺前面を5つの区画に分けた列柱型石棺であるが、中央区画の図像 (すなわち、サン・ボーディユ教会の石棺は「勝利の十字架」、ヴァティカンの石棺は「トラディティオ・レギス」図) を除いてすべて同じキリスト受難の物語 (左より「洗足」、「十字架の道行き」、「ピラトの前のキリスト」、「ピラト洗手」) が描かれている。また、アルル考古学博物館蔵の「トラディティオ・レギス」石棺 (Rep. III, 53)⁽¹⁵⁾ も5つの区画を持つ列柱型石棺であるが、ここでは中央の3つの区画を用いて「トラディティオ・レギス」図を描いている。そして左右両端の区画に配された聖書物語場面は「洗足」と「ピラト洗手」であり、サン・ボーディユの石棺や前述のピオ・クリスティアーノ美術館蔵の「トラディティオ・レギス」石棺と同じ物語を選択している。こうしたことから、「トラディティオ・レギス」図と「勝利の十字架」表現は、石棺中央に置かれるが、双方の図像は相互に入れ替えが可能であったことをうかがわせる。また、石棺リスト20番に挙げたヴェゾン・ラ・ロメーヌの石棺は、中央の図像が現在では欠損しているが、ヴィルペルトは「勝利の十字架」石棺と判断している。一方レペルトリウム第3巻では、ピオ・クリスティアーノ美術館蔵の石棺 (石棺リスト6番) との比較から、「勝利の十字架」石棺である可能性は否定しないものの、ミラノのスティリコの石棺⁽¹⁶⁾ との比較などから「トラディティオ・レギス」図の可能性があると指摘している。また、アクラマティオの使徒たちの中央には、「トラディティオ・レギス」図と「勝利の十字架」表現のどちらかがおかれるのが通例であり、どちらの図像もキリスト称揚、という同じ意味を持つ図像と考えられていたと思われる。

「トラディティオ・レギス」図は、キリストから初代のローマ司教とされる使徒パウロへの法の授与を描くことで、ローマ教会首位権を主張した図像と言われている。もともとは教会堂のアプシスの空間を飾る表現であった。それが次第に本来の意味を失い、アクラマティオの使徒たちを伴うことでキリスト称揚の図像へと発展していったと考えられる⁽¹⁷⁾。「勝利の十字架」表現も、アクラマティオの使徒たちの中心に配されることにより、本来の十字架の死に対するキリスト勝利、という受難物語サイクルの中の一表現としての意味合いは薄くなり、より普遍的なキリスト称揚表現になっていったいえるだろう。

だが一方で、この「勝利の十字架」表現は、もともとはキリストの磔刑を示唆する十字架表現ではなく、この図像全体で、単にキリストの勝利を表現していると考え

(15) サン・ボーディユ教会、ピオ・クリスティアーノ美術館、アルル考古学博物館蔵の石棺の図版は、拙稿、前掲論文、図5-7参照。

(16) Rep. II, 149, 150

(17) 拙稿、前掲論文、104頁、B. Snelders, *The traditio legis on early Christian sarcophagi*, in *AnTard.*, 13 (2005), pp.321-333



図7 ヴァチカン、ピオ・クリスティアーノ美術館蔵、夫婦の石棺 (Rep. I, 43)

のが適当であるようにも思われる。「勝利の十字架」表現の最古の作例と思われるイエルサレムの石棺では、キリストの公生涯のエピソードが描かれてはいるが、受難物語サイクルは示していない。選択されているエピソードは当時のフリーズ型石棺上に描かれた一般的な旧、新約聖書の物語場面である。イマゴ・クリベアータの下に「勝利の十字架」表現が配されているが、その場所は「ライオンの穴のダニエル」が比較的多く描かれる場所であった(図7)⁽¹⁸⁾。ライオンの洞窟から生還したダニエルはキリストの復活の予型ととらえられており、長くキリスト教美術の中で好まれる図像である。石棺上では彼は裸体で、正面を向き、オランスのポーズをとっている。このようなシンメトリックな表現は石棺中央に描くのにふさわしいものであった。キリストの勝利を示す「勝利の十字架」表現も、左右対称な表現形式であり、その意味内容からも公生涯のエピソードの中央に置くのにふさわしい表現と判断されたのであろう。このように、「勝利の十字架」表現は、皇帝美術の戦勝記念碑、トロフェウムの表現から派生してキリストの勝利を示したものであったが、その形状や意味内容からキリストの十字架上の死と復活を想起させるため、受難石棺の中央に配されたのであろう。そして、アクラマティオの使徒たちと組み合わせられることによって、再び受難物語サイクルから離れ、より普遍的なキリスト称揚図像として、「トラディティオ・レギス」図と同様の扱いを受けるようになったのである。

磔刑図以外の受難物語表現は、「エルサレム入場」、「ペテロの否認」、「キリスト逮捕」、「ピラト洗手」、「十字架の道行き」が4世紀中ごろには出揃い、「勝利の十字架」

(18) たとえば、ピオ・クリスティアーノ美術館蔵の夫婦の石棺が挙げられる。WS 96, Rep. I, 43, 4世紀第二四半期

石棺上において、プリミティブな受難物語サイクルが成立した。しかし、「勝利の十字架」表現が用いられるのは5世紀初頭までである。5世紀に入って磔刑図が出現すると、キリストの勝利を表現してきた「勝利の十字架」表現は姿を消すのである。5世紀前半に描かれた磔刑図におけるキリストは、キリストの復活の予型とされた「ライオンの穴のダニエル」のように堂々とした姿で自らの勝利を示していたからである。

図版出典

図1 Rep. II, tav. 102

図2 辻佐保子『ローマ サンタ・サビーナ教会木彫扉の研究』、中央公論美術出版、2003年、第7章
挿図6

図3-5 筆者撮影

図6 AA. VV., *Dalla terra alle genti, La diffusione del cristianesimo nei primi secoli*, Electa, 2006, p.239,
no.10

図7 筆者撮影